

## 中国ゼロコロナ政策下におけるフィールドワーク —甘肅省の牧畜地域へ—

スルナ

キーワード：コロナ禍、深セン市、西寧市、肅北モンゴル族自治州

はじめに

コロナ禍の2020年12月20日から2021年4月5日にかけて、筆者はフィールドワークのために日本から中国に渡航した。調査地は甘肅省肅北モンゴル族自治州（以下、肅北県）の牧畜地域である（図1）。成田空港から航路で深セン市、それからまた航路で青海省の省都西寧市に行き、そこから高速列車<sup>1</sup>で肅北県へ向かった（図1）。2020年11月当時は航空券代が非常に高く、一番安いのは深セン市着便であった。深セン市から肅北県や最寄りの敦煌空港への直行便はなく、航空券代も高かった。また、経由地でもホテルか自宅での1週間の健康観察期間が義務付けされていた。そのため、筆者の姉が居住している西寧市を経由地として選び、姉の家で健康観察期間を過ごすことにした。

筆者の研究テーマは肅北県のモンゴル牧畜民による家畜への民間療法である。修士課程1年目の2020年2月と3月にフィールド調査を行うため、2020年1月に航空券を購入した。新型コロナウイルス感染症（COVID-19、以下新型コロナ）の感染拡大が報道されていたが、中国湖北省を除き、日中間の渡航はまだ停止されていなかった。状況の変化に対する懸念はあったが、調査準備を進めていた。だが、2月に入ると、中国での新型コロナ感染症対策が厳しくなり、空港運航便の運休や減便が相次ぎ、当時購入していた中国への航空券もキャンセルとなった。3月には日中間の渡航が停止した。結局、予定していたフィールド調査を実施できないまま、修士課程2年生になった。また、本特集内の児玉報告にもあるように、千葉大学は4月から10月まで入校制限が実施された。図書館や研究室にも入れない状況であり、調査データ不足で修士論文を書き終えられないのではないかと、不安を抱えていた。2020年10月から中国は中国籍及び有効な居留許可を有する外国人は中国への入国することができるようになり、筆者の国籍は中国であるため、中国に入国することが可能になった。また、2020年10月から出入国制限措置が徐々に緩和され、中国への渡航便が再開しはじめた。そこで、筆者は修士課程を1年延長し、2020年12月末に中国へ渡航し、フィールドワークを実施することに決めた。

本稿では、コロナ禍における中国渡航と現地滞在中の生活の一端を報告する。また、オンライン聞

---

<sup>1</sup> 中国語で动车。

き取りによる 2022 年 12 月時点の調査地の状況を紹介する。

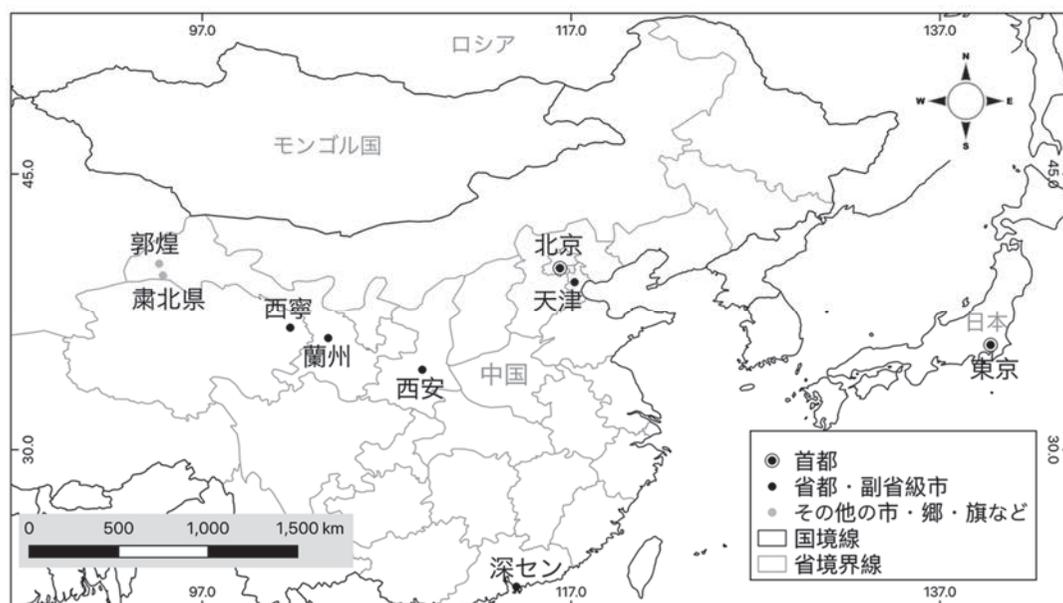


図 1 中国の訪問滞在都市位置図（ユニバト作成）

## 1. 渡航準備

### 1.1 航空券の手配

コロナ禍での渡航は、それ以前より非常に手間がかかった。まず、航空券の購入は以前より複雑になった。2020 年 10 月から、各国から中国へ就航する国際航空便は、一航空会社、週一便、一路線のみで運行されることになった<sup>2</sup>。また、後述する健康コードの関係から、直行便を利用する必要があった。便数の減少と直行便という制限から、航空便の確保が困難となり、航空券代はコロナ禍前の数倍以上になっていた。

筆者が購入していてキャンセルになった航空券は、成田空港発、西安市経由、西寧市着で、費用は往復 2542 人民元<sup>3</sup>であった。2020 年 11 月に新たに購入した航空便は成田空港発、深セン市経由、西寧市着で、費用は片道 7860 人民元<sup>4</sup>であった。これは、当時の運行便の中では最安値だったが、それでも新型コロナ拡大前と比べれば 3 倍の値段だった。また、日本に戻ってきたのは、2021 年 4 月 5 日

<sup>2</sup> 中华人民共和国駐日本大使館「12 月中日航班信息」（中華人民共和國駐日本大使館「12 月中国日本フライト情報」）2020 年 12 月 2 日 [http://jp.china-embassy.gov.cn/ztnew/2016boanew/202012/t20201202\\_9459243.htm](http://jp.china-embassy.gov.cn/ztnew/2016boanew/202012/t20201202_9459243.htm) 2022 年 11 月 28 日閲覧。

<sup>3</sup> 2020 年 2 月時点で 1 元＝15.96 日本円、2542 元は約 4 万 570 円。

<sup>4</sup> 2020 年 11 月時点で 1 元＝15.56 日本円、7860 元は約 12 万 2300 円。

で、航路は西寧市発、天津市経由、成田空港着である。往路の航空券代は片道 2725 人民元<sup>5</sup>であった。往復で 1 万 585 元となり、コロナ禍以前に比べて約 4 倍になった。

## 1.2 PCR 検査と健康コード

2020 年 11 月 8 日より、搭乗前 48 時間以内に、中国大使館が指定する検査機関で PCR 検査と血清特異性 IgM 抗体検査を受けて陰性証明を受けることが義務になった<sup>6</sup>。両方が陰性の場合、ダブル陰性証明が発行される。その証明書を使って健康コードを申請するとともに、渡航時にも持参する。「搭乗 48 時間以内」とは、検体採取日から起算されるため、即日証明書発行できる機関で予約する必要がある。11 月に航空券を購入後、検査機関を調べた時にはすでに予約はいっぱいだった。幸いなことに、11 月末に出発日の前日に検査を予約することができた。検査機関は「医療法人社団 HELENE 表参道ヘレクリニック<sup>7</sup>」で、費用は 1 万 6700 円であった。PCR 検査は口腔の方式で、抗体検査は指から血液採取するものであった。12 月 18 日午前中に検査を受け、同日の 18 時に日本語と英語記載のダブル陰性証明が渡された。

ダブル陰性証明を入手後、中国籍の場合、「防疫健康コード国際版」の WeChat<sup>8</sup>ミニプログラムより受検した検査機関を選択し、必要な情報と共にアップロードする必要がある。アップした情報を大使館の確認完了後、「HS」マークのグリーン健康コードを取得できる。外国籍の場合は、大使館の HP で指定のサイト<sup>9</sup>より入手する必要がある。受検したその日、ダブル陰性証明を手に入ると早速健康コードを申請した。30 分ほど待って、その日の 19 時頃にグリーンの健康コードを取得した。グリーンの健康コードの上部には有効期限が記載されている。その下には、無効になるまでの残り時間が示される。有効期限が過ぎると、搭乗可能を示すグリーンコードは灰色に変わる。

## 1.3 その他の準備

ほかに、データ通信用 SIM カードを購入した。当時、健康コードの登録や入境に関わる情報入力を、ほとんどスマホで操作していた。また、中国では、日常生活において、現金よりスマホ決済が多く利用されている。そのため、Wi-Fi がないとスマホがネットに繋がらないのが不安だったので、出

---

<sup>5</sup> 2021 年 4 月時点で 1 元=16.893 日本円、2725 元は約 4 万 6033 円。

<sup>6</sup> 中華人民共和国駐日本国大使館「日本から中国へ行く乗客へお知らせ 搭乗に PCR 検査及び抗体検査の陰性証明が必要になります」2020 年 11 月 2 日 [http://jp.china-embassy.gov.cn/jpn/dsgxx/202011/t20201102\\_10428650.htm](http://jp.china-embassy.gov.cn/jpn/dsgxx/202011/t20201102_10428650.htm) 2022 年 11 月 28 日閲覧。

<sup>7</sup> 表参道ヘレクリニック HP [https://stemcells.jp/pcr inspection/](https://stemcells.jp/pcr%20inspection/) 2022 年 11 月 28 日閲覧。

<sup>8</sup> 中国の「LINE」とも言えるメッセージングアプリ。しかし、チャットだけでなく、ショッピングやチケット予約、電子マネー決済、送金などの機能もあり、現在中国では日常生活に欠かせないツールとして利用されている。

<sup>9</sup> 健康コードの申請サイト <https://hrhk.cs.mfa.gov.cn/H5/> 2022 年 11 月 30 日閲覧。

発前に中国国内で使用できる SIM カードを用意した。また、SNS で海外渡航に関する投稿をチェックしたところ、空港や飛行機内で防護服、保護メガネ、N95 マスク、フェイスシールドを着用する写真や報告をよく目にしたので、自分でも保護メガネと N95 マスクを用意した。

## 2. 中国渡航

### 2.1 日本・成田空港出発

出発日は 2020 年 12 月 20 日、日本時間 16 時 30 分であった。

出発当日、成田空港には出発時刻の 5 時間前の 11 時頃に到着し、時間的に余裕はあった。しかし、チェックインカウンターにはすでに長蛇の列ができていた。行例に並んでいる際、係員が陰性証明と健康コードを確認した。また、係員の見せた QR コードをスキャンして、入境に関する情報を記入した。チェックインカウンターでは、上記の全部をもう一度確認してチェックイン手続きが完了した。

空港での手続きは予想以上に簡単で、行例に並んでいるうちに知り合った留学生と一緒に、空港内で昼食をとれる場所を探した。当時の成田空港は、以前と違ってほとんど人がいなかった。コンビニやドラッグストアなども含めて閉店している店が多く、レストラン周辺にはちらほらと人影があり、マクドナルドだけが営業している状況だった。そこで、マクドナルドで食べ物を買ひ、窓の近くの広い場所に行き、一緒にいた留学生と別に座り、筆者はその日初めてマスクを外して、ランチを食べた。

機内では、ソーシャルデスタンスを保っていなかった。一部の人は自主的に白い防護服や防護メガネや透明のフェイスシールド、N95 のマスクを着用し、全身をしっかり包んでいた。感染予防のため、機内食はパンやペットボトルの水など簡易的な物であった。周りの人と時間帯をずらしての飲食なら可能だった。とはいえ、5 時間のフライト中、マスクを外して飲食する人はほとんどいなかった。筆者は保護メガネと N95 マスクで搭乗し、フライト中も外さず、機内で飲食もしなかった。

### 2.2 中国深セン市宝安空港到着

深セン市の宝安空港に到着したのは、北京時間 21 時 40 分ごろだった。機内の係員の指示を従い、座席前例から順に降りた。入国後は、全員並んで、全身防護服を着用した係員が入国者の額に体温計を向けて、体温を確認した。その後、席に座り、PCR 検査を待っていた。しばらくして係員に呼ばれ、空港内にある PCR 検査会場にて口腔と鼻腔の方式での検査を受けた。検査後、検査を行った医者からもらった医療用の N95 マスクを着用しなおして、結果を待った。検査結果が陰性の場合、続いては入国審査である。幸い、同じ飛行機の乗客全員陰性であった。乗客は自分の預け入れ荷物を受け取っていなかった。荷物は係員によって消毒され、バス乗り場の近くにまとめて置かれていた。空港を出る前に受け取り、バスに乗った。当時、荷物が重く、入国審査や検査でずっと持っているならかなり大変なので、移動してくれていたのはとてもありがたかった。宝安空港を出るまで、係員や医療関係

者、また同じ飛行機に乗った人たちと一緒に行動していたので、成田空港のように空いている感じがしなかった。

### 2.3 隔離ホテルまでの移動

空港に出た時、バス乗り場には隔離ホテルへ移動するバスが2台あった。どちらか自分で選べたが、どのホテルに行くのか、まだ教えてくれなかった。当時、中国のSNSでは、隔離ホテルのことを中身が見えないブラインドボックス<sup>10</sup>と呼んでいた。どのホテルなのか、中はどうなっているのか、いくらかかるのか、到着するまではわからないためだ。

筆者は最寄りのバスに乗った。隔離ホテル到着の20分ほど前に行き先をアナウンスで伝えた。ホテルに到着したのは夜中1時過ぎた。バスから順番に降りて手続きを行い、ホテルの部屋に入る前に、消毒された荷物を受け取った。空港からホテルまで全員、白い防護服を頭までかぶり、医療用のN95マスクと保護メガネをつけていた。そして、空港に着いてからホテルの部屋に入室するまで、アルコール消毒と体温チェックも頻繁に行われ、新型コロナウイルスに対して強い緊張感を持っている印象を受けた。

## 3. 広東省深セン市滞在

### 3.1 ホテル隔離

2020年の12月、中国に入国した後は最低14日間のホテル隔離が行われていた。ホテルによって、料金や隔離環境が異なっていた。その後、目的の町に移動してからの隔離場所とその日数は、各地方政府によって異なっていた。

筆者は、深セン市の羅湖区にあるバンブーガーデンホテル<sup>11</sup>で隔離された。空港からホテルに着くまでバスで約1時間かかった。

ホテルと食事費用はすべて自己負担であった。1泊あたりの料金は280元、14日間の合計料金は3920元<sup>12</sup>であった。隔離開始の翌日に支払った。食事は1日3食(8時、12時、17時)、85元であり、14日間の合計料金は1190元<sup>13</sup>であった。筆者の隔離ホテルでは、デリバリーが可能だったため、ホテルの食事をキャンセルした。14日間のデリバリーの食事代はだいたい800元<sup>14</sup>であった。デリバリーにした理由は、注文できる料理の種類が多いこと、好きなものを注文できること、注文に時間制限がないこと、そしてホテルの食事代よりデリバリーの方が安くなることを予想していたためである。中国では、レストランやスーパーなどのデリバリーサービスが広く利用されているため、隔離中にス

---

<sup>10</sup> 中国語で盲盒。

<sup>11</sup> 中国語で竹園賓館。

<sup>12</sup> 2020年12月時点で1元=15.868人民元、3920元は6万2222円。

<sup>13</sup> 約1万8889円。

<sup>14</sup> 約1万1111円。

マホアプリで食品や必要なものを届けてもらうことができ、とても便利で、配送料も高くはなかった。配達員はホテルに入れないため、ホテルのスタッフが配達物を受け取り、注文した人の部屋のドアまで届けてくれていた。各部屋のドアの前に小さなテーブルが置いてあり、そこにスタッフが配達物を置き、ドアをノックして「届きましたよ」と伝えられる。

清掃については、接触を避けるために、客室の清掃は行われてなかった。ゴミ出しは、毎日ドアの外に出しておく、ホテルのスタッフが捨ててくれた。洗濯はデリバリーで洗剤を注文し、自分で洗濯して部屋干しする必要があった。

隔離中は、3日に1回、果物（写真1）やお菓子やケーキ（写真2）が届けられた。



写真1 隔離ホテルから提供された果物



写真2 隔離ホテルから提供されたお菓子とケーキ

ホテルのスタッフによると、筆者の隔離ホテルは深セン市羅湖区の翠竹街の管轄で、届けられたものは翠竹街道弁事所<sup>15</sup>からの人道的好意<sup>16</sup>だという。冷蔵庫がないホテルに隔離され、食べ物は無駄にってしまったと SNS でよくみていたが、筆者の泊った部屋には冷蔵庫があった。届けられたお菓子やケーキやデリバリーで注文したパンや牛乳を入れて、隔離中の朝食にしたので、食事代の節約にもなった。

空港で、もう1台のバスに乗った人に連絡したところ、その人の隔離ホテルは、1泊あたりの料金は580元、14日間合計8120元<sup>17</sup>であった。食事代は90元で、14日間合計1260元<sup>18</sup>とのことだった。また、そのホテルではデリバリーサービスが禁止されていたため、ホテルの食事にせざるを得なかったという。宿泊費用が高いのは、新築ホテルであったかもしれないとその人と話していた。筆者の隔離ホテルの部屋の広さは十分だったが（写真3）、1981年開業のホテルで、建物や設備は古く、エアコンがつけられなかった。そのため安かったのであろうが、曇りの日が続くと部屋が寒かったことだ

<sup>15</sup> 街道弁事所とは、中国の都市における末端管理組織（夏 2001:175）。

<sup>16</sup> 中国語で人文关怀。

<sup>17</sup> 約12万8889円。

<sup>18</sup> 約2万円。

けは少し辛かった。



写真3 隔離ホテルの部屋内部



写真4 PCR 検査に並ぶ人々と医療関係者

2020年12月、千葉大学はすでにオンライン授業の形になっていた。部屋にはWi-Fiが完備されていたため、年末のオンライン授業やメールのやりとりなどに特に支障はなかった。ただ、中国ではネット制限があるため、Googleなどのホームページが開けないなど少し不便であった。

14日間の隔離期間中は、窓は少ししか開けられず、2回のPCR検査の時を除いて、部屋から一步も出られない状況だった。PCR検査は鼻腔式であり、宿泊してからの第6日と14日目に行われた。写真4は窓から見えるPCR検査に並ぶ人々と白い保護服を着ているPCR検査関係者である。6日目のPCR検査を受けたときは少し痛かったが、部屋から出られたことが嬉しかった。検査費用は無料であった。それ以外は、1日に2回の定期検温があった。9から11時の間と15時から17時の間に医者さんがドアをノックし、体温を測りながら、体調はどうかと聞いていた。発熱した場合には、病院に運ばれると聞いていたので、発熱していないか心配していた。幸いなことに、隔離中は体調が良く、熱も出なかった。同じ便の人たちにも感染者がいなかったようで、筆者は濃厚接触者になることもなかった。

隔離ホテルでの手続き、配送、ゴミ回収の担当者、検温やPCR検査をしてくれる医師は白い防護服とメガネ、N95マスクを着用し、全身をしっかりと包んでいた。

ホテル隔離は14日目に解除された。その日の午前中にPCR検査を終え、部屋で荷物を整理していると、突然ドアをノックされ、午後から隔離解除と連絡を受けた。急いで荷物を整理し、解除手続きに並んでいる間に、一泊できる別のホテルをスマホで予約した。別のホテルを予約した理由は、解除日が隔離始まってからの14日目なのか15日目なのか事前に知らなかったため、15日目に深セン市から西寧市へ向かう航空券を買っていたためである。また、筆者の隔離ホテルには、その後も隔離される人が来るため、交差感染を防ぐため隔離後の連泊を禁止していた。

隔離中、2020年の7月にモンゴル国から中国に入国した友人から当時の状況を聞いた。彼女は、内

モンゴルのフフホト市で14日間隔離され、隔離が終わると入国時に記入した目的地をチェックされ、バスで強制的に空港まで連れて行かれた、ということであった。SNSでは、隔離が終えたばかりの人はホテルが受け入れてくれない、という声もあった。しかし、筆者の場合、ホテルから出たら、すべてが自分で決めることができ、突然の「自由」に驚かされた。宿泊予定のホテルに電話したところ、隔離解除した証明書を持っているかと聞かれた。証明書を持っていると答えると、それなら大丈夫だと言われ、宿泊できた。

### 3.2 深センの状況

深セン市でもう一つ驚いたことは、商店や飲食店が普通に営業していたことである。タクシーで予約したホテルに着くと、街ではマクスをきちんとつけていない人をよく見かけた。まだ営業中のレストランや商店も目についた。同じホテルに隔離されていた留学生とホテルに荷物を置き、19時頃、一緒に夕食を食べに行った。

日本では、飲食店の営業時間が短縮されていた。レストランでは席を空けて、ソーシャルディスタンスを保つことは必須であった。しかし、深セン市で食事をした店では、客同士のソーシャルディスタンスを確保してなかった。入店時の健康チェックもしてなかった。店内では、お客さんがマスクをしておらず、大きな声で話していた。最初店に入ったとき、少し心配でテイクアウトにしようかと躊躇したが、隔離が終わったばかりで、ホテルに戻る気分でもなかったため、店で食事することにした。21時ごろ食事を終えて外を散歩すると、飲食の各種屋台がまだ営業していて、夜市<sup>19</sup>がととにもぎやかであった。

一泊して、翌日ホテルの近くで朝食をとり、空港へ向かった。朝食の店に入る際、健康チェックもなく、店内でもソーシャルディスタンスを保っていなかった。地下鉄に入る際、健康コードが確認された。駅の入り口で、深セン市で使われている「粤康碼<sup>20</sup>」のQRコードをスキャンし、自覚症状の有無など健康状況に関するいくつかの質問に答え、過去14日間の滞在地を入力した。深セン市での隔離中、自覚症状がなかったため、入力後すぐグリーン<sup>19</sup>の健康コードが表示された。それを係員に見せ、地下鉄に乗れるようになった。空港に着いた後、「粤康碼」の健康コードを提示し、検温された。その後、チェックインカウンターで、PCR陰性証明と入境してから14日間の隔離証明が求められた。空港では、人がたくさんいて、飲食店やコンビニも通常通り営業していた。搭乗後、機内ではほぼ満席だった。フライト中、飲食する人は周囲にはいなかった。

2020年12月27日から2021年1月5日までの15日間の深セン市滞在では、海外からの入国に対する厳しい防疫管理が印象的であった。当時発表された広東省の新型コロナ感染状況によると、全省

---

<sup>19</sup> 夕方から真夜中まで屋台、露店、雑貨、売店、移動販売などが営業する。

<sup>20</sup> 広東省の健康コード、本特集の李報告を参照。

で確認された感染者の大半は海外からの入国者であった<sup>21</sup>。日常生活での対策は、マスクの着用と交通機関利用する際に健康コードの提示だけで、空港では、検温と PCR 陰性証明の提出が必要だけだった。

#### 4. 青海省西寧市滞在

コロナ禍以前、日本から中国へ行く時は、いつも西安市経由で西寧市に到着していた。コロナ禍の影響で航空券が数倍高くなったため、ルートを変更し、当時最安値だった深セン経由の便にすることにした。

西寧市の空港では、また過去 14 日間の滞在地を登録、健康状況に関する質問に答え、西寧市で使われているグーリンの健康コードを取得した。それを、空港職員に見せると、簡単に荷物受取口に進み、荷物を受け取って空港から出た。姉が空港に迎えに来てくれて、車で市内に移動した。

##### 4.1 健康観察期間

2021 年 1 月 5 日に市内の姉の家に着くと、まず姉の家がある社区に報告のため電話をかけた。報告の内容は、日本から深セン市に入学し、14 日間隔離された後西寧市到着したこと、隔離された証明書とグーリンの健康コードを持っていることであった。報告後、その日から 1 月 12 日まで 1 週間自宅で健康観察した。

筆者は、姉、姉の家族と一緒に自宅待機期間を過ごした。健康観察期間中、食べ物や自炊用の食材はデリバリーで届けてもらった。配達員は配達先に到着すると、玄関のドアの外に商品を置き、自分で部屋の中に持ち込む。1 月 12 日に、社区の人に電話をして、1 週間は自覚症状がなく、体温もすべて正常であったことを報告した。その結果、電話によって健康観察期間は終了した。

##### 4.2 西寧市の状況

「自由」に戻り、街へ出ると、飲食店、スーパー、商業施設、公園などは通常の営業を行っていた。ただ、公衆施設の入り口には、健康コード確認と手指消毒、非接触型体温計による検温が必須であった。小規模の販売店、飲食店でも、検温と手指消毒が徹底されていた。また、マスクの着用も一般化していた。それ以外、日常生活は以前とほとんど変わっていない感じがした。店内では、深セン市と同様に、ソーシャルデスタンスを保っていなかった。一般の人びとの間でもそれほどの危機感はないようであった。

---

<sup>21</sup> ウィキペディア「広東省における新型コロナウイルス感染症の発生状況（2020 年）、（2021 年）」にて 2020 年 12 月 27 日から 2021 年 1 月 5 日までの広東省新型コロナ感染状況を参照 [https://zh.m.wikipedia.org/zh-hans/Category:2019\\_冠狀病毒病廣東省疫情](https://zh.m.wikipedia.org/zh-hans/Category:2019_冠狀病毒病廣東省疫情) 2022 年 11 月 30 日閲覧。

中国では、1月から学校の冬休みに入る。筆者の甥の幼稚園も休園であった。また、中国の学校の冬休みは日本より長く、旧正月をはさんで約1ヶ月半<sup>22</sup>ほどである。休みの期間が長いので、甥は1月中旬から民間の英語の早期教育教室<sup>23</sup>に通い始めた。

何度か、甥を教室までに送りに行った。その早期教育の教室は大きなショッピングモールの中にあった。ショッピングモールに入る際に検温を行い、入り口に置かれたアルコールで手指を消毒した。甥の教室に行くと、その近くには音楽、美術、テコンドー、ダンスなど、ほかの教室もあった。授業中に教師も子供たちもマスクを着用することになっていた。授業が終わるのを待っている間、筆者は、パソコンを持って近くの書店にいた。それは飲み物を注文して長居できる場所であった。書店の入り口に消毒用のアルコールが置かれていた。ほぼ毎回、人がたくさんいた。設置された席に座ったり、本棚の近くや階段に座ったりして、本を読んでいる人がよく見える。勉強コーナーと個室も設けられていて、個室は人気でいつも満席、筆者は一度だけ使用することができた。また、その書店の一角では、陶芸などの手芸体験ができるのも、多くの人がいる理由の一つであると感じた。書店にいる人たちは、ソーシャルデスタンスを保っていなかったが、見渡す限りマスク着用をしっかりと行なっているようであった。甥の授業が終わりかけの頃、教室に迎えに行く。迎えに行った人たちと一緒に教室の外で待っていると、周りの教室からも一斉に生徒たちが出てきた。

中国と違って日本の大学の冬休みは1週間なので、筆者は西寧市に到着した時は、千葉大学の冬季休業期間の終わりであった。1月の院ゼミはZoomで行われ、ティーチングアシスタントを担当していた学部の授業は、Moodleを使って行われていた。ゼミの受講や課題、ティーチングアシスタントに関する業務を、ほとんど姉の家や前述の書店で終えることができた。

2021年2月の始まり、筆者は西寧駅から高速列車で肅北県に向かった。当時、乗車にはPCR検査が必須であった。西寧駅に入る前に、健康コードのチェック、検温と手指の消毒が実施されていた。筆者の健康コードはグリーンで、体温も正常だったため、スムーズに進んだ。発車を待つ間、駅の中を見渡すと、コンビニや飲食店が営業していた。筆者がいた車両では乗客皆マスクを着用していた。一方で、ソーシャルデスタンスを保たないまま座り、途中でマスクを外して水を飲んだり、お菓子を食べたりしていた。

上記のように、筆者は西寧市滞在中コロナ禍に対して感じたのは、西寧市の人々は、マスク着用、検温、消毒、健康コードのチェックに慣れたような状況である。また、ショッピングモールや書店、子どもの教室などでの様子からみると、新型コロナに対する警戒感はあるものの、人びとの危機感がそれほど高くはなかった。それは、当時の新型コロナの感染状況によるものだろう。青海省で発表された新型コロナの感染状況によると、青海省では2020年1月と2月に感染者が確認されたが、同年

---

<sup>22</sup> 旧正月は旧暦のため、毎年変動する。そのため、冬休みの期間は毎年変わる。

<sup>23</sup> 中国で英語早教室。

3月から2021年3月まで、青海省全域では新たな感染者が出ていなかった<sup>24</sup>。

## 5. 甘肅省肅北モンゴル族自治県滞在

西寧市から敦煌市経由で肅北県に向かったのは、2021年2月2日であった。それから、同年3月末までの53日間滞在した。2021年2月から3月にかけて、甘肅省全体では、蘭州市だけでロシアからの航空便で感染者が確認されたという報道はあったが、敦煌市と肅北県で、感染例はまだ出てなかった<sup>25</sup>。そのため、低リスク地区とされていた。甘肅省について時からよく高リスク地区や低リスク地区という言い方は耳にするようになった。本特集の李および格格日勤報告にあるように、中国では、感染者の数や感染者が行動した場所を「高・中・低」リスク地区に区分して管理している（本特集李報告参照）。

当時、西寧市も低リスク地区とされていたため、肅北県までの移動はスムーズであった。敦煌駅に着いた後、高速列車から降りた人々は2列に並び、甘肅省で使われている健康コードを取得した。深セン市や西寧市と同様、健康コードの取得に必要な情報は、過去14日間の滞在地と自身の健康状況であった。出口に2つのテントが設置され、そこで係員に健康コードをチェックされた後、駅を出た。

### 5.1 健康観察期間

敦煌駅からタクシーで肅北県に向かった。肅北県に到着すると、社区に到着したことを報告した。西寧市は低リスク地区であるためPCR検査をしなくていいと言われていた。しかし、当時肅北県では外部から来た人にPCR検査を行う規定があり、念のため病院に行き検査してもらった。また、自主的に1週間自宅で健康観察することにした。西寧市にいる時と同様に、電話で社区に1週間の健康状況を報告した後、自宅待機が解除された。

### 5.2 旧正月

2021年の旧正月（ツァーガン・サル）は2月であった。筆者は、旧正月の3日前に自宅での健康観察期間を終了し、家族と一緒に正月を過ごすことができた。町にでると、旧正月用品を売る店で買い物する人も多く、町が旧正月に向けて活気づいていた。

2021年2月の時点において、肅北県での旧正月の過ごし方は以前とあまり変わっていなかった。

---

<sup>24</sup> ウィキペディア「青海省における新型コロナウイルス感染症の発生状況（2020年）、（2021年）」にて2020年1月から2021年3月までの青海省新型コロナ感染状況を参照

<https://zh.m.wikipedia.org/zh-hans/2019冠状病毒病青海省疫情#2021年> 2022年11月30日閲覧。

<sup>25</sup> 甘肅省疾病予防管理センターHP「新型コロナウイルス感染症情報速報」にて2021年2月2日から同年3月末までの新型コロナ感染状況を参照 <http://www.gscdc.net/html/news/yqtb/news-list-yqtb-35.html> 2022年12月2日閲覧。

以前と同様、日の出とともに民族衣装を着て、親戚や知人を訪問して新年の挨拶、お祝いを交わす。その後、家族や親戚などが集まりごちそうを囲みながら過ごす。コロナ禍の影響を感じられるのは、朝訪問に行く途中、マスクを着用している人を見受けられたことであった。しかし、挨拶をするときや家に入る時は、ほとんどマスクを外して話していた。筆者自身も、感染予防意識が緩んでいたであろう、マスクを外していた。

### 5.3 フィールド調査

筆者のフィールド調査は、主に文献調査、聞き取り、参与観察によるものである。渡航前は、中国でも図書館などの施設が利用できなくなったり、人との接触が難しくなったりすることを想定していたが、2021年の2月と3月の時点では、コロナ禍の影響によってフィールド調査が制限されることはほとんどなかった。

文献調査は、主に肅北県の図書館と県獣医局で行った。筆者は主に、民間療法に関する資料や地方誌、牧畜業誌などを収集した。県獣医局を訪れる際、特に感染予防の対策はされていなかったように感じた。マスクをして仕事をしている職員が見られるくらいであった。

肅北県の図書館は正月明けから開館し、以前と同じく午前9時から午後18時まで利用可能であった。感染予防対策のために、入り口には消毒用アルコールや非接触型体温計、来館者名簿が置かれていた。入館の際は、自分で手指消毒して検温する。その後、名簿には、日時、氏名、体温、電話番号の記入が必要であった。図書館を利用する人が少ないため、名簿はほとんど筆者と筆者の友人の記録になっていた。そこで、収集した資料を読み、フィールド調査データの整理を行った。当時、筆者の友人はイギリスの大学で修士課程に在籍していた。時差の関係で、夜中の3時から出席必須の授業を受け、課題を日中図書館でこなすという生活だった。また、グループワークは実際に会えず、オンラインでの連絡には時間がかかり、かなり苦労していた。

聞き取り調査は、インフォーマントの家で行った。肅北県では1999年と2010年に、それぞれ2回にわたり牧畜民を町に移住させる定住化プロジェクトが行われた。そのため、現在ではほとんどの牧畜民が県人民政府の所在地がある町と牧畜地域にそれぞれ家を持っている。牧畜地域にある住居が町から比較的近い牧畜民は牧畜地域と町の間で往復頻度が高い。牧畜地域の住居が町から離れている牧畜民は通常牧畜地域に居住することが多い。牧畜作業が忙しくない時期にのみ町の家に住む場合もある。筆者はインフォーマントの町にある家で聞き取りを行った。また、インフォーマントが住む牧畜地域に行き、可能な限り日常の労働に参加しながら調査を行なった。2月から3月にかけて、家畜の出産が始まり、牧畜作業一番忙しい時期であった。

牧畜地域に行くと、感染予防のためマスクをつける人はほとんどおらず、また新型コロナを警戒する雰囲気も全くなく、普段と変わらない生活が続けられていた。マスクをしている人がいたとすれば、

それは春で朝晩が寒かったからである。

新型コロナに関しては、新型コロナを恐れているような感じはなかった。当時、実感として遠くの病気のように、牧畜民たちは新型コロナよりも干ばつや黄砂のほうに気にしていた。筆者の調査も、新型コロナではなく黄砂の影響を受けた。2021年3月中旬、モンゴルで発生したサイクロンや寒気による強風の影響を受けたため<sup>26</sup>、中国の北方では激しい砂嵐や黄砂が舞う悪天候があった。ちょうど、筆者はモンゴル国と国境を接する肅北県のゴビ地域での調査に向かう途中でその砂嵐に遭遇したため、調査をいったん中止し、町に戻った。結局、その後またゴビ地域に行く機会はでなかった。

前述のように、2021年2月から3月にかけて、肅北県と近隣の敦煌市ではまだ感染者が出ていなかった。筆者が感じた感染予防対策は、外部からきた人に対するPCR検査と1週間の健康観察だけだった。日常生活では、マスクをつけている人はコロナ禍以前よりよく見かけるようになり、図書館で手指消毒や検温が増えたことである。牧畜地域に行くと、新型コロナの影響は全く見られない。牧畜民にとって、新型コロナは遠い病気であり、より身近な干ばつや黄砂の方が心配であった。当時、現地では、新型コロナの影響を強く受けていると感じたのは、筆者の友人のような留学生だけだった。

## 6. 2022年12月現在

2022年12月の時点で、新型コロナの世界的拡大から3年が経過している。オンライン聞き取りやメディア報道によると、前回の渡航中に滞在していた深セン市と西寧市では、中国のほか地域と同様にすでにPCR検査の大規模実施による検査の徹底化が行われていた。また、一部の地域では、在宅隔離や住宅区の封鎖が行われていた。本特集の李報告にあるように12月7日の新型コロナウイルスの合理化措置が公表されるまで続けられた。12月8日から行動制限や健康コードの利用がなくなり、封鎖されていた地域が解除された。それとともに、中国と海外との往来に関する措置も何度か変更されている。

### 6.1 ゼロコロナ政策下の西寧市

中国人民網の報道<sup>27</sup>によると、2022年12月1日、西寧市だけで466人の感染者が確認された。また、高リスク地区<sup>28</sup>になっており、筆者は滞在していた頃とはかなり状況が異なっている。

2022年12月2日の時点では、4度目の封鎖中、西寧市の人々は厳しい外出制限によって、すでに40日間家から出られない生活が続けられていた。その間、筆者の姉がいる居住地区では、PCR検査

---

<sup>26</sup> 人民網日本語版「再び黄砂が襲来 今年、黄砂が頻発している原因は？中国」2021年3月29日 <http://j.people.com.cn/n3/2021/0329/c94475-9833706.html> 2022年12月10日閲覧。

<sup>27</sup> 人民網「西寧市で陽性感染者466名発見」2022年12月2日 <http://qh.people.com.cn/n2/2022/1202/c378418-40217727.html> 2022年12月3日閲覧。

<sup>28</sup> 国務院客戸端疫情リスク検索 <http://bmfw.www.gov.cn/yqfxdjcx/> 2022年12月3日閲覧。

と食材の買い出しのための最小限の外出以外、家から出ることが許されなかった。PCR 検査は、全員毎日受ける。各棟の住民は、1「单元<sup>29</sup>」ずつ降りて、検査の列に並ぶ。一棟の検査が終わると、医者たちは臨時検査所の位置を変えて次の棟に行くという移動式である。移動式になる前、PCR 検査所は固定されており、一つの居住地区の住民全員が一ヶ所で検査を受けていた。待つ時間の長さや交差感染を防ぐために、医者たちと PCR 検査所は移動式になったとのことである。食材の買い出しは、2、3日に1回できる。地域の職員は食材や野菜を売っている人に連絡を取り、2、3日に1回住宅エリアに来てもらうとのことである。買い出しのために部屋を出られるのは、1住戸につき1名のみである。筆者の姉の話によると、封鎖生活は少し辛かったが、しかしより大きな役割を担っている PCR 検査の医療関係者たちや封鎖中に住民のサポートを行っている地域の職員やボランティアの方は、封鎖中の生活を支えるためにコロナ禍でもずっと働いていて、より苦勞していたとのことだった。

西寧市の幼稚園や小学校は、2022年の夏休みから休校している。中学校は夏休み明けに1ヶ月だけ開校し、その後再び休みになり現在に至っているという。

2022年12月8日から、封鎖が解除され、移動制限もなくなった。毎日のPCR検査は停止され、任意で行われるようになった。しかし、突然の解除により感染者が増加し、SNSでも感染後の体調変化に関する内容、感染への不安に関する内容が多数投稿され、話題になっている。日常生活の中では、二重マスクと手袋を着用し、消毒液を持ち運び姿がよく見られ、人々の危機感が高まっていることがわかる。道は空いていて、行動制限と健康コードによる安心感がなくなったためか、あるいは新型コロナに感染して家から出ていないためであるか、一時的に封鎖前より外出する人が少なくなった。12月末現在、友人たちによると、行動制限が解除されたため、旧正月が近づくにつれて、帰省する人が増えたためか、街に活発が戻ってきているのを感じたとのことである。

## 6.2 ゼロコロナ政策下の肅北県

2022年12月時点で、肅北県では近隣の都市部への道路が封鎖されていた。県内では牧畜地域への移動は可能だったため、牧畜民は牧畜地域と町を行き来することができていた。他方で、3日ごとのPCR検査が義務付けられており、県外から帰ってきた人に対して2週間自宅で隔離される。日常では、グリーンの健康コードが必要であり、結婚式などの宴会に参加する場合は、24時間以内にPCR検査で陰性であることが求められていた。

12月8日以降、西寧市と同様に義務づけられていたPCR検査が中止され、近隣の都市部への道路封鎖も解除された。健康コードの使用は中止になり、宴会参加にもPCR検査を求めないようになった。その結果、12月12日に行われた結婚式の出席者の中から新型コロナの感染者が確認された。肅

---

<sup>29</sup> 一つの階段を共有する集合住宅の区画。集合住宅（楼）、複数の「单元」がある。普通は階段の入り口には、「1单元」「2单元」...という標示がある。一つの「单元」がある集合住宅もある。

北県で確認されたのは初めてだった。その後、複数の感染者が発生し、感染が急速に拡大している。筆者の家族や親戚、友人も次々と陽性になった。感染した場合は、自宅隔離し、6、7日に1度PCR検査を受ける。陰性の場合、日常生活に復帰するという。幸いなことは、肅北県ではまだ死亡例は出ていないとされる。

肅北県のモンゴル病院から抗原検査キットや解熱剤などの薬のほか、モンゴル薬を購入することができていた。感染していない人も予防のためにモンゴル薬を購入する人も少なくないと言う。

12月中旬、SNSでの投稿や電話連絡でも、新型コロナについて語られることが多く、肅北県での緊張感は、これまでになく強くなったように感じた。現在では、感染者が回復するにつれて、この時期を乗り越えれば、日常生活が再開できるだろうという声が増えている。

### 6.3 中国から海外との往来に関する措置

中国国内での新型コロナ対策が変化するとともに、中国から海外との往来に関する措置についても何度か調整が行われた。

2022年6月から、入国者に対する行動制限は、「入境地点で14日間に集中隔離+7日間の自宅健康観察」から、「入境地点で7日間の集中隔離+3日間の自宅健康観察」と短縮された<sup>30</sup>。同年11月16日以降、「入境地点で5日間の集中隔離+3日間の自宅隔離」になった。中国渡航前のPCR検査について、大使館の指定検査機関がなくなり、搭乗前48時間以内任意の検査機関で1回の検査で陰性証明を取得すればよい、とした<sup>31</sup>。

さらに、2022年12月27日の中国駐日本大使館HP<sup>32</sup>で更新された最新措置によると、2023年1月8日以降渡航の48時間前にPCR検査を受け、結果が陰性であれば渡航可能となる。また、これまで義務づけられてきた出発前の中国大使館への健康コード申請が廃止された。入境後のPCR検査および集中隔離についてもおこなわないとされた。

おわりに

本報告で述べてきた通り、2020年から2021年初頭にかけて、中国は非常に厳しい水際対策を行っていた。思い返せば、渡航前の準備から入国後のホテル隔離が終了まで、非常に手間がかかり、渡航費用もコロナ禍前の数倍であり、いったん感染してしまうと全てが水の泡となるため、その間は感

---

<sup>30</sup> 日本貿易信仰機構JETRO「中国、入境者の隔離期間を7日間に短縮」2022年6月29日  
<https://www.jetro.go.jp/biznews/2022/06/6dad6aa0b6dad01b.html> 2022年12月31日閲覧。

<sup>31</sup> 中華人民共和国駐日本国大使館「中国渡航前検査及び健康コード申請の最新措置について」2022年11月15日 [http://jp.china-embassy.gov.cn/jpn/tztg/202211/t20221115\\_10975339.htm](http://jp.china-embassy.gov.cn/jpn/tztg/202211/t20221115_10975339.htm) 2022年12月31日閲覧。

<sup>32</sup> 中華人民共和国駐日本国大使館「中国渡航前検査及びの最新措置について」2022年12月27日  
[http://jp.china-embassy.gov.cn/jpn/tztg/202212/t20221227\\_10995914.htm](http://jp.china-embassy.gov.cn/jpn/tztg/202212/t20221227_10995914.htm) 2022年12月31日閲覧。

染への不安が常につきまとっていた。空港や隔離ホテルでは、白い防護服に身を包んだ乗客や関係者がさらに緊張感を高めていた。しかし、隔離が終了すると「自由」になり、深セン市内の緊張感のなさに驚いた。西寧市でも公衆施設でソーシャルデスタンスを保つということをしてなかった。混雑しているのに緊張感は見られず、人々は平気だった。新型コロナに影響されている点というと、深セン市と西寧市では、マスクの着用は義務づけられていた。検温、消毒、健康コードのチェックは、日常生活で必須であった。肅北県では、町ではマスクをつける人がコロナ禍以前多く見かけるが、実際の生活ではあまり変化が起こってなかった。牧畜地域では、新型コロナは牧畜民にとってまだ届いてない遠い病気であった。それよりも、身近な砂嵐にもっとも関心を寄せていた。肅北県でのフィールド調査で直接的な新型コロナの影響を受けなかったことも全く予想外だった。中国滞在中、筆者は徐々に緊張や戸惑いがなくなり、感染予防意識も緩んでいった。

しかし、2022年12月現在、西寧市と肅北県での状況は、筆者が滞在していた頃とは全く異なる状況になっている。厳しい封鎖管理やPCR検査の徹底化が行われ、封鎖生活が明けた頃に、新型コロナ感染が急速に拡大し、大きな不安を覚えている状況である。年末に入ると、街に活気が戻ってきて、感染者の回復にも伴い、時期を乗り越えれば、日常の生活が再開できるだろうという声が増えている。

中国から入国者に対する水際対策も緩和され、中国駐日本大使館による検査機関指定がなくなり、健康コード申請は廃止された。入国者に対するホテルなどでの集中隔離も徐々に短縮され、2023年1月8日以降は行わないようになるとされている。近い将来、制限はさらに緩和され、海外のあらゆる地域から中国への渡航も容易になるだろう。

筆者はコロナ禍の中で、現地でフィールド調査をできるという幸運に浴し、修士論文の執筆や博士課程への進学を実現した。今は、家族を心配しながらも、一刻も早い感染の終息に向かっていくことを願うのみである。

## 謝辞

渡航期間中、経済的負担を軽減していただいた、公益信託前田増三記念奨学基金（2019年～2021年）に感謝を申し上げたい。また、現地での調査を助けてくださった皆様、文章の添削を引き受けて下さった先輩方、調査研究をご指導くださっている児玉香菜子先生に、御礼申し上げたい。

## 引用文献

夏建中（2001）「現代中国の都市におけるコミュニティー管理組織の歴史、構造および機能」『立命館産業社会論集』37-2:175-190.

（するな・千葉大学大学院人文公共学府後期課程）

Fieldwork experience under China's Zero-COVID Policy:  
From Japan to a pastoral area in Gansu Province

Suerna

I traveled from Japan to China for fieldwork, from December 20, 2020, to April 5, 2021. During that time, I stayed in three areas: Shenzhen City, Guangdong Province; Xining City, Qinghai Province; and Subei Mongolian Autonomous Country, Gansu Province. This paper mainly describes the preparation for traveling to China, entry quarantine, health observation at home, what the three cities look like during the COVID-19, and fieldwork during this travel, focusing on my personal experiences. It also briefly touches on the ever-changing situation as of December 2022, based on online interviews and media reports.